

1◆タイトル:

女子大生のスリランカ結婚！奮闘記

2◆サブタイトル:

- ・新婚生活は常夏のジャングルで。
- ・秘境からの強烈な愛と仕打ちの洗礼

3◆キャッチコピー:

- ・愛と欲望のままに生きるスリランカ人との戦い
- ・「シャワーは井戸！毎食カレー！英語は通じない」君に嫁げるか
- ・バカンスに来るくらいが、ちょうどよかった。

4◆企画概要:

彼の地の「ありえへん」をコメディタッチにノンフィクションでお送りします。

『親戚の葬式に出ている間に、雇っている従業員が婦女暴行の**冤罪**で捕まった！』
といった調子で、表では奇想天外な事件や人間模様、文化を紹介しながらも、新たな発見や示唆に富んだ内容を書き上げていきたいです。

例えばスリランカは「可哀想」と一緒にたに憐れまれる対象になっている「途上国」ではありますが、意外にも笑顔に溢れ、医療教育が無償なのはもちろん、食うに困らないよう福祉がしっかりしています。先進国が思う「途上国」の本当の現状を知らせ、ステレオタイプな「可哀想」を払拭したいと考えます。

また、日本人の私からは、この国には物は少ないけれど人々は毎日支え合って心から生きて幸せそうだ、と見えました。そんなスリランカを通し、飽食ではあるけれど鬱病で**自殺**したり**孤独死**していく人が多くいる日本を見つめ直し、心から生きられていますか、幸せですか、と問いかけたくなります。

私自身、以前に精神を患っていたのですが、夫を含めたスリランカの人々や仏教に触れて癒された経験があります。また、スリランカにはヒンドゥーとイスラム、カトリックに仏教と様々な宗教があるのですが、民族戦争が10年前まであったとは思えないほどうまく共存しているので、その話も掘り下げたいです。

国際結婚には多くの書類が必要でそれがとても手間だったり、ビザ目的で日本人に近くスリランカ人も少なくともビザの審査がきつかったりと、苦労話やあるある話、**参考になる話**も盛りだくさんです。

そのような感じで基本的には笑えるとしても話を書くつもりではありますが、国際結婚や宗教、哲学など多岐に渡り踏み込んで書きたく思っています。

5◆企画者名:

今野風花（ペンネーム：ふらんまり）

6◆企画者プロフィール:

大学在学中にスリランカ人の彼と出会い、
帰国した彼を訪ねたらそのままスリランカで結婚することに。
気候や食事が合わない上に、言葉が通じない状況で精神的に追い詰められることもあったが、彼の支えやスリランカの風土に元気づけられ、日本語学校や飲食店を経営。
短い間ではあったが現地の人々と同じ生き方をし、途上国、村社会ならではのトラブルや心のふれあいを体感し、日本のいい面や不足している面を再認識した。

7◆読者ターゲット

●メインターゲット：スリランカに関わる人・興味がある人。

治安がよく、人々が優しいということで熟年移住や女子旅の候補として地味に注目されているスリランカ。その人々に対し、実際に住んでみないとわからない現地の様子を伝えられたらなと思います。

既に住んでいる方やスリランカ人と結婚している方はもちろん、日本語ボランティアやビジネスを考えている人にもお勧めですし、アールヴェーダ、スパイス、宗教、世界遺産に興味がある方にもアプローチすることができます。

●サブターゲット：休学や留学、結婚をしたい学生・国際結婚をしたい人。

人と違う道を進むのには勇気が要ります。
ですが前例があれば「自分にもできないことはない」と思えますし、一歩踏み出すきっかけにもなります。
この本はそういった人たちを勇気づけることができると考えます。書類の準備など大変だったことも包み隠さず伝えることで、今後の参考にしてもらいたいと思います。

8◆企画のねらい:

日本にもっとスリランカのことを知ってもらおう。
海外に出て行ったり、国際結婚をしたり、他人と違うことをする人の後押しをしたい。
あるある話や仰天話で笑ってほしい。
笑い話を提供したりスリランカから私が学んだ日本人に足りないものをみんなに共有して、日本をもっと明るい自由な国にしたい。

9◆企画の背景:

以前から、文章を書く仕事に就きたいという思いとブログをいつか書籍化したいという思いがありました。

そういった思いがある中、スリランカでの経験を友人に話しているうちにそれが笑いや勇気になっていることに気づき、このことを本にしたらもっと多くの人の役に立つのでは、と思うようになりました。

それと同時にお世話になったスリランカのことを他の人にもっとよく知ってもらいたく、そしてスリランカから日本も学べることがあるのでは、という考えから企画を出しました。

10◆類書との差別化:

スリランカで結婚した人の本や、現地で生活した女性視点の本は1冊もありませんが、強いて言うのなら『恋こがれてスリランカ』かと思います。

強気で好奇心旺盛な女性が現地の人々と触れ合い、文化を紹介したり、時には闘ったりもする。軽快なタッチで描かれており、思わずクスッとしてしまいます。

ですが私の場合は、繁盛してきた店を大家に取り上げられそうになったり、金を無心に来た親戚に水をかけて応戦したりと生ぬるい闘いではなく、その本気さが笑える部分だと自負しています。また、『恋こがれて〜』は金持ち目線で書かれており、割とラグジュアリーな生活をしているので、実際のところ現地の人々がどんな暮らしをしているかまでは推し量れていません。私の企画は現地の人々に紛れて住んだからこそその内容であり、そこで差異がついています。良くも悪くも土臭い話になっています。

『ダーリンは韓国人（統一教会の国際結婚によって海を渡った日本人たちの奮闘記）』

等、海外に渡った女性の国際結婚の本はちらほらとあるのですが、どちらかというドキュメンタリー調で、固い内容になっています。

国際結婚に関して言えば『ダーリンは外国人』が有名ではありますが、外国人の勘違いある等は共通しているとしても、あちらは日本に居住しており、内容は日本の文化や言葉についての豆知識系になっています。住んでいる場所が日本か海外かで内容がかなり変わるので、区別はついていると思います。

『英国紳士と国際結婚@ロンドン』という本は元々ブログだったものを出版したものであり、ネットの評価を閲覧すると、ブログの既存ファンが購入していることがわかります。こういったファンを取り込めるのがブログのいいところであり、それを大いに活用すべく最近になってブログを再開しました。

第12回出版甲子園

自分自身のブログとの差別化についてですが、日記のようにひとつひとつ独立しているトピックを大きく再編し、書き下ろしや修正を加えつつ一連の流れを作り、読み応えのあるものにしたいと考えております。

11◆企画者の要望:

表紙は**熱帯雨林**の雰囲気を出しつつ現地の写真をスクラップ風にアレンジしたり、クリップに挟むようなデザインがいいなと思っています。新規の人にまず手に取ってもらうために固い雰囲気をなるべく払拭し、**ワクワク感**を出していきたいです。できればカラー写真を掲載したいです。カラーでなくとも、ブログで写真を多用していたので要所要所に写真を挿し込みたいです。

12◆構成案:

- 1章 急遽決まった結婚！庭にはマンゴー、カカオ。未知なる世界へようこそ
—結婚の様式・日本との違いや戸惑い・触れ合い
- 2章 夫が無職に。半ばヤケにレストラン始業
—鉄パイプを買い付けて溶接するところから。オープン前日にスコールで水浸し！
- 3章 耐えきれない。暑い辛い辛い！
—お金への価値観・泥棒・言葉の隔たり・ギャップ
- 4章 見かねた夫と旅行へ。そこでも事件は起こる
—旅行事情・バイクの故障・ぼったくり・ヘルメット盗難
- 5章 現地語も英語も話せない日本語教師、誕生。
—現地の日本への強い憧れに感動！
- 6章 近所とのめんどくさ～い付き合い
—親戚に当たり屋をされ無心される
- 7章 世界遺産と警察
—遊びに来た従姉妹が携帯を落とし、警察沙汰へと発展
- 8章 4月。あけましておめでとうございます！
—仏教の新年、葬式。民族や宗教間、政治の問題。
- 9章 従業員ジョン、逮捕。だが山は登る
—持病で無理だと思っていたスリーパーダへの登山、心の変化

13◆見本原稿:

あらすじ→妹と従姉がスリランカに遊びに来ており、世界遺産を案内しているうちに従姉

が携帯を紛失

「従姉がこの辺で携帯を落としたのですが、見かけませんでしたか？」
シンハラ語で話しかける日本人の私に、一瞬ギョッとするフリーの現地ガイドたち。
だが状況を察し、周辺の人たち総出で探してくれた。
この日、ポロンナルワの遺跡で下を向いて歩くスリランカ人の集団を見かけていたら、私の
せいです。驚かせたらすみません。
迷彩服を着た軍人さんまでも協力してくれ、連絡先まで交換してしまった。ごつい帯銃が
生々しいが、とても紳士的。10年前まで命を賭してこの国を守ってくれた人だ。

結局その場で見つけることができなかつたのだけど、なんとジャンタ（夫）の携帯がキミち
ゃん（従姉）の携帯に繋がった。
どうやら拾った人は車で移動しており、追いかけてこいとのこと。
なので妹が切望していたサファリは取りやめ、携帯を追うことに。
だがいかんせん観光客なわけで、このへんについては不案内。
どこどこに來い、と言われても全くわからない。
従姉の携帯に電話をかけるときは国際電話になるため、とても料金がかかる。
プリペイド式の携帯なものだから、大量のカードを商店で購入するついでに道行くおじさ
んに道を尋ねた。
そしたら、なんと私たちのバンに乗り込んできた！
道案内してくれるって。ありがたやありがたや！
携帯を彼に渡し、指示される通りに進む。

（中略）

ものすごい距離をものすごいスピードで駆け続けること2時間。
今日はもう追い付けないだろうということになり、とりあえず案内してくれたおじさんを
返すことになった。
「あのバスに乗るよ！」
おじさんは荒野の対向車線に来ていた赤い国営バスを指さす。
そして助手席のドアをあけ颯爽と立ち去ろうとした。
イケメンかよおおお
かつてなさすぎるほどのイケメンさに、気が付いたら思わずギュッとお札を握らせていた。
「いないよ」
イケメンすぎる。ハゲだけど。行いがイケメンすぎる。映画化するなら俳優は斎藤さんでお
願いします。

第 12 回出版甲子園

それでもお車代として・・・！と尚も渡したら、はにかみながら半分だけ受け取って動き出しているバスへと去って行った。

妹は所在なさげに途中でゲットしたサトウキビをポリポリしている。

(中略)

結局キミちゃんのフライトまでに携帯は戻らず、その件は私たちが引き受けることになった。

彼らとはクルネーガラという、うちからバイクで 2 時間のところで落ち合うことになっていた。

熱帯雨林気候とはいえ夜冷えはするし、更にバイクに乗るともなると油断ならない。ということでサンダルに靴下（長ズボンを IN）スタイルを敢行。ポットに砂糖入りのホットコーヒーも忘れない。

道中、野外パーティーをしているところになぜか赤提灯がぶら下がっているのを見かけた私たちは思わずそこに近づいたところ、海外青年協力隊の 60 前後の老夫婦（青年という括りの広さよ）に思いがけずエンカウントしたり、

警察に呼び止められて免許所持の確認をされたところ、財布を落としていることに気が付き、警察に必死の説得をし私のパスポートを担保にその場をあとにし。最後に財布を出した薬局に行ったら閉店しており、そこからがすごく大変だったり、したのだけど、今回は割愛。

(本編では詳しく書きます)

迷いながらも指定された住所に着いたらそこは幼稚園でした。は？

わけがわからず泥棒たちの名前を道行く人々に訪ねても知らない、とのこと。

電話は何度も何度もかけたけれど出ないし、あんな大変な思いもしたのに（自業自得）無駄足になったというのか。

どうしよう。30分立ち往生し寒くて心身共に青ざめてきた頃、iphone のプリインストールの着メロが鳴動。

幼稚園の脇を抜けた大通りの、漢字が書かれた青いバスを見つけろ、とのこと。お安い御用さミッションポッシブル。

すぐさま奇天烈な漢字を搭載したバスを発見しクラクションを鳴らしたところ、いきなり胡散臭いシャーマンが出てきた。いや、まじで。上半身裸で変な刺青とか入ってる。やばい。

第 12 回出版甲子園

月並みな表現で、やばい。

「お前らが電話をかけまくってきたせいで旅行が台無しだ！」がなってきた、シャーマン。それに負けじと「いや、そもそもお前らが携帯を盗んだからいけないんだろう」ジャンタが応戦。

バスの中からわらわらと鼻息の荒い黒い顔が出てきた。完全に形勢は不利。

だって私はキミちゃんだから。キミちゃん本人じゃないと携帯は渡さないとかあいつらが抜かすから、わたしゃ言葉もなにもかもわからないキミちゃんのフリをせねばならんのです。がんばれジャンタ。

それでも私はいてもたってもいられないフリをし、携帯を持っているおばさんに「back to me it!」と掴みかかった。中年女性は私の頬を挟み込み、「警察で話し合おうね」と英語で語りかけてきた。

(中略)

(警察署にて)

どうやら、ハメられたらしい。こいつらの息がかかった警察署に連れてこられたのだ。スリランカはとて身内を大切にす文化で、その前には正義もなにも通用しない。

話はこうだ。

かわいそうなボケたおばあさんが携帯を拾い、気づいたらバスに持ち込まれていた、私たちは旅行を妨害された被害者である、と。

ツッコミどころ満載なわけだけど身内の言い分の前には正義なんてなんのその。

でっぷりした警察官は到底無理な言い訳を、さぞお察しますみたいな顔をして聞いている。

「この可哀想なおばあさんは私の祖母よ」

英語でおばあさんの肩を抱く中年女性。

「晩御飯はまだかいの」

ひっこんでろオババ、こんなタイミング良くボケられるのは頭がしっかりしているなによりの証拠だ。

シャーマンとか警察官の総計 10 人に詰め寄られる私たち。

「泣いて」

私にこっそり語りかけるジャンタ。泣いてじゃねえよおおおそれでも泣いた。泣きました。褒めて。

第 12 回出版甲子園

ちょっとは効果があったのか、警察が咳払いをし、「本当にキミちゃんなんだね」と念押しをしてきた。「yes」短く答える私。ああ苦しい。

「ではその証拠を見せてもらおうか」と、携帯を渡してきた。ロックを解除しろというお達しだ。もしこのロックを解き損ねたら私たちは詐欺罪でブタ箱行きだ。おれらそんなところ行きたくねえだ。うちへ帰るだ。

何度も予行練習してきたパターンを指でなぞる。

あいた。

あいた。ああえがった。ああ一えがった。

空気が少しまろやかになる。

はあ、ひと段落ではある。

が。

タダでは返そうとしないのがスリランカ人、すべてを無心に帰結させようとするスリランカ人。もはやお家芸。

「ちょっとくらい迷惑料として包んでやれ」

それをみんなの前でいう警察官、

おぬし、わるよのおおお！！

逆に私たちが迷惑こうむったんだけどね？

第三者がフェアを装い私たちが絶対的悪人に仕立て上げる且つフォーマルに慰謝料を払わせる効果的な一言であった。いや、あっぱれ。

その言葉に背中を押された金の亡者たちは「わかってるよな？」という目を私たちに向ける。わたしは自分のバッグの中をガサゴソしたのだけど、その際財布に入れず生で入れているたくさんのお金を覗き込まれた。いやんエッチ。気がはやり過ぎ。

その中からうやうやしく綺麗な封筒を取り出し、「ごめんね」とおばあさんに手渡した。

透けてお札が見える。

おばあさん、笑みが堪えきれないよ！！

シャーマンなんて小躍りしてる。中年女性も満足げだ。

携帯が外国人の所持品と知って、最初からゆするつもりでいたのだろう。

そのお金でまた旅行にいかうだなんてバスの中で話して、シャーマンも威圧しやすいようにそれっぽい恰好をしたのだろう。小賢しい。

色めき立っている欲のかたまりたちを残し、わたしたちはそそくさと退散した。

封筒の中身を見られる前にね！！

第 12 回出版甲子園

案の定、歓声が一転、怒号に変わった。

はっはっはー！！

それもそう、

封筒の中身はソ連の旧紙幣なのさ！！はっはっは。

換金できる両替商を探してへトへトになるがいいさ。

泥棒たちにアッカンベーをして最大速度で帰宅したのです。